

# Report of the investigation in China : For the construction of Manchuria immigration postwar period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/46547">http://hdl.handle.net/2297/46547</a>

# 訪中調査報告

—— 満州農業移民戦後史の構築を視野に ——

小 林 信 介

## 目 次

- I はじめに
  - 1. 調査の概要
  - 2. 問題意識の所在
  - 3. 凡例など
- II 2015年10月訪中調査
  - 1. 日本人開拓民および満州国に対する意識－聴き取り調査より－
  - 2. 満州農業移民の歴史的経験の風化と継承－跡地調査ならびに施設訪問より－
- III 2016年9月訪中調査
  - 1. 千振開拓団跡地聴き取り調査の要点
  - 2. 内モン聴き取り調査の要点
- IV おわりに

## I はじめに

本稿は、2015年および16年の両年に実施した訪中調査の報告である。

### 1. 調査の概要

2015年度の調査は、一般社団法人満蒙開拓平和記念館が主催・企画し、2015年10月10日から14日までの日程、ハルピン・方正県・長春を調査地とし、現地合流者を除いて10名が参加した。調査の主眼は、残留邦人の中国人養父母に対する聴き取りであり、加えて、天理村開拓団跡地や日本人公墓などを訪ねた。

一方、2016年度の調査は、極東ロシアの専門家など9名で構成された調査団で、2016年8月31日から9月9日までの日程、主として内モンゴルが調査

地である。中国の少数民族であるオロス族を含むロシア人の足跡を訪ねたが、満州農業移民の関係では弥栄・千振両開拓団の跡地を訪ねたほか、満州国時代の日本および日本人の足跡を聞き取ることに成功した。

## 2. 問題意識の所在

両調査は、その経緯や目的、さらには構成メンバーも大きな違いがある。ただし、それぞれの調査団において個人的に重視した視座は、満州移民の戦後史を描くことであり、そのための満州ないし満州国の実像に迫ることにおいた。さらに両調査の共通項として、現地住民からの聴き取り調査を方法論の中心においたことも挙げられる。

満州農業移民や満州(満州国)に対する現地人への聴き取り調査は、中国における研究蓄積はもとより、日本側からも徐々に調査が進められつつある。例えば、長野県歴史教育者協議会は、2003年に訪中調査報告書を公表したほか、2007年に黒龍江省社会科学院の調査報告書である『日本向中国東北移民的調査与研究』を翻訳・解説した書籍を刊行している<sup>1)</sup>。また、石川県から送り出された白山郷開拓団の集団自決を主題とする石川県教育文化財団『8月27日-旧満州国 白山郷開拓団』(同財団、2004年)にも、第6章「中国側の認識」として、現地での聴き取り調査の結果が収録されている。一方、満州(満州国)については、中見立夫ほか『満洲とは何だったのか』(藤原書店、2004年)が、第5章「中国にとっての満洲」ならびに第6章「周辺地域にとっての満洲」として、日本以外の満洲への視点を提供している。

このように満州農業移民や満州に対する日本以外の視点の包摂は、2000年以降の研究における顕著な特徴といえるが、今日に至るもその蓄積が十分に進んだとは評価できない。この原因としては、日中関係の悪化ももちろん挙げられるが、経年に伴う証言者の絶対的減少も大きい。とりわけ後者の進展が不可逆的であり、かつ、視点の拡張が研究深化のひとつの方向性である以上、証言を可能な限りアーカイブ化していく試みは、重要性を増している。そこで、本稿の問題意識のひとつとして、現地の視点を証言によって描くことを設定する。

また、満州農業移民研究・満州研究ともに、対象時期を1945年までとするに留まらず、それ以降の歴史をも含めて叙述する傾向が強まりつつある。

例えば、2003年から2012年にかけて刊行された『下伊那のなかの満洲』(全10集)は、一貫して戦後を射程にした聴き取りを掲載している。なお、長野県下伊那郡は、郡市単位でみた場合、最大の満州農業移民送出地域である。戦後を射程に入れている点では、高橋健男『渡満とは何だったのかー東京都満州開拓民の記録ー』(ゆまに書房、2013年)も同様である。さらにこのことは、書籍に限らない。満州農業移民に特化した日本初の記念館<sup>2)</sup>である満蒙開拓平和記念館(長野県下伊那郡阿智村)では、2013年4月の開館当初から、帰国支援事業など満州農業移民の歴史について、戦後まで射程に入れた展示を続けている。また本年4月に開館した岐阜県郡上市のたかす開拓記念館でも、満州農業移民のそれに続いて半分近くの展示が戦後の国内再開拓に割かれている。

こうした事実は、満州農業移民の歴史が、戦後をも射程にしてようやくその全体像が捉えられることを示しているといえよう。とはいえ、満蒙開拓平和記念館とたかす開拓記念館の戦後期の展示の中心が、帰国支援と国内再開拓に分かれていることは、戦後期までを含める重要性和同時に、そのための多様な分析視角の必要性も示唆している。拙著『人びとはなぜ満州へ渡ったのかー長野県社会運動と移民ー』(世界思想社、2015年)において、満州農業移民の時期区分に戦後期も加えた叙述を試みたが、そのためには、時系列による展開と同時に、分析の枠組みを整理する必要があることを痛感した。

以上をふまえ、もうひとつの問題意識として、満州農業移民戦後史の構築を視野に入れることとする。ただし、時系列的展開や分析枠組みの整理については、すでに別稿を予定している。そこで本稿では、あくまで満州農業移民の戦後を意識するに留めたい。

### 3. 凡例など

これまで「満州農業移民の戦後」との表現を用いてきたが、ここでその考え方や定義を明らかにしておく。

研究動向が示すように、満州農業移民を含めた満州の史的経験は、日本に限定されるものではない。一方で、「戦後」という表現は、ロシアはともかく、中国や朝鮮半島において、必ずしも日本と完全に一致するわけではない。したがって、別途適切な表現が必要ともいえるが、本稿では便宜的に「戦後」を

用いることとする。

次は、満州農業移民を叙述する際の戦後が、いつから始まるのかという点である。一般的な意味での戦後では、問題が生じてしまう。情報伝達の違いなどの要因で、45年8月9日のソ連軍侵攻を契機とした逃避行の開始日は、事例によって異なる。とはいえ、1945年8月15日にはすでに逃避行をしている開拓民が、少なからず存在している。逃避行の終焉は、養父母などに引き取られる、抑留される、途上で死亡する、そしてそれらがなく日本内地に帰還するに大別できるが、いずれの場合においても、数ヶ月ないしは数年におよぶことがある。このため、45年8月15日以降に戦後を設定すると不都合が生じる。逃避行が現地開拓団の崩壊を意味していることも勘案すると、これを満州農業移民史における戦後の始まりとする。

最後に、本論で扱う証言について述べておく。どちらの調査でも、証言者とは通訳を介してやり取りした。2015年の調査では、満蒙開拓平和記念館が、帰国後に改めてテープ起こしをしてから翻訳作業をしている。このため、実際の言葉とやや異なって翻訳されている場合を否定できない。また、すべての証言者を含む私人の実名は明らかであるが、許諾を得ていないなどの関係で、本稿ではアルファベットにて表記する。

## II 2015年10月訪中調査

2015年度の調査の具体的な日程は、図表1の通りである。

### 1. 日本人開拓民および満州国に対する意識－聴き取り調査より－

この調査は、主体が満蒙開拓平和記念館であるため、聴き取りに際してのインタビューは、同館の関係者2名が中心となって進められた。ただし、それぞれの最後には、希望する参加者が質問をする機会が設けられた。いずれの聴き取りも、1時間

図表1：2015年度調査日程

月 日	場 所	内 容
10月10日	哈爾濱市郊外	天理村開拓団跡地
11日	方正県	中日友好園林 聴き取り①
12日	哈爾濱市街	731部隊記念館 聴き取り②
13日	長春市街	聴き取り③ 偽満故宮博物館
	長春市郊外	河野村開拓団跡地

程度であり、また、コーディネートをしてくれた中国側の関係者が同席している。

証言者の略歴などは、次の通り。年齢は聞き取り時であり自己申告。在所は満州国当時のものだが、その具体的時期は必ずしも同一ではない。

- A：84歳。女性。方正近郊。
- B：87歳。男性。方正近郊。
- C：推定91歳。残留孤児養母。哈爾浜。
- D：92歳。残留孤児養母。新京(長春)。

#### (1) 日本人・日本人開拓団に関する証言

日本人や日本人開拓団に対する印象は、証言者によってかなりの違いがある。

Aさんは、「日本人が中国に来たのは、中国の人を全滅させることが目的だった」という認識を示しつつ、「悪いのはリーダー」で「開拓団は農民だから悪い人ではない」と述べた。戦争責任を為政者に負わせ、それと日本国民を区別するこの歴史認識は、中国の公的な歴史認識と一致している。しかし、彼女の場合、「日本人は、中国人を奴隷のように扱っていた。中国人は家畜と同じ。牛や馬と同じ」とも証言している。これは、開拓団で現地人が使役させられた事例を見聞きしていることに加え、日本の撤退後に兄夫婦が若くして殺害されたことが大きく影響していると思われる。兄夫婦を殺害したのは、日本人ではなく中国人の匪賊であるそうだが、「もし満州国がなかったら、兄が亡くなることはなかったと思う。匪賊も盗賊もそこまで増えなかった」と考えている。また、日本のために働いていた兄は、劣悪な住環境のために凍傷に罹ったことも語ってくれた。

このようにAさんは日本人の満蒙開拓に悪い印象を持っているが、同席していたBさんは必ずしもそうではない。開拓団をどう思ったかという質問に対し、彼は「開拓団は中国を占領しようとした」と答えてはいるが、概して悪印象を語ってない。農家であったが既耕地を取り上げられなかったこと、取り上げられた農家も他所を開墾するための農機具や家畜が与えられたという認識、開拓団の土地と隣り合わせだったが基本的に没交渉だったことなど、

被害を直接被っていないことが背景として考えられる。

瀋陽出身で日本人の子どもを哈爾濱で引き取ったというCさんの「開拓団の皆さんは、日本の国策で中国に開拓をして侵略したけれど、敗戦をしたからしょうがない。百姓だから、私たちは温かい目で接しなくてははいけない」との言説は、Aさんのそれと通じるものがある。しかし、彼女はAさんと異なり、当時の日本人について明確な悪印象を述べることはなかった。結婚前に強制的に連行された経験を持っていたこともあり、夫は日本人のことを嫌っていただろうと語るものの、夫の日本人感を共有していることがうかがえる証言は、まったく出てこなかった。Cさんの場合、開拓民を被害者としてもみる認識を上塗りするだけの被害経験を持っていないことや、一方で、哈爾濱で逃避行の最中にある日本人の悲惨な姿を見聞いたことが、Aさんや夫との違いを生んでいるのではなかろうか。

Cさんと同じ都市の住民であったDさんは、日本人に対する印象を明確に語ることがなかった。新京の人たちが日本人のことをどう思っていたのかという問いに、「一般市民は特に何も思っていない」と答えているが、この一般市民には、Dさん自身も含まれると考えられる。日本人が現地人(質問の文言は「百姓」)を虐げている現場を「見たことがない」のみならず、日本人と直接「関わったことがない」ばかりか、「普通に町に出ても(日本人を)見たことがない」と証言してるためである。さらに、「私たちは満州国時代の日本人はここで威張っていたと聞きますが、評判はどうでしたか」という誘導的な問いに対しても、「会ったことがないから」と答えたのみである。Dさんの証言は、新京において日本人の居住区域がかなり明確であったことと矛盾しない。新京すべての住民が日本人と接点を持たなかったわけではないが、居住区域の明確化(峻別)は、日本人との直接的な接点を持たない彼女のような人も、数多く生みだすこととなる。

以上のように、日本人や日本人開拓団に対する印象は、少ない証言者の中においても多様である。そして、その多様性は、証言者個人の当時の対日本人体験が一様ではないことに起因していると推察できよう。

## (2) 満州国に対する意識

日本人や日本人開拓団に対する印象は、少ない証言者の中においても多様である一方で、満州国に対する意識は、ほぼ様に希薄であった。

Bさんに、満州国時代に満州国人だという意識を持たされたことがあるかと質問したところ、質問の内容自体が理解できないようであった。おそらくこれは、満州国の国籍が無かったことに起因していると思われる。また、終戦時に自分が何人だと思っていたのかという質問には、「日本人」と答えている。当時の満州を、満州国としてではなく、日本の一部として実感していたための回答ではなかろうか。なお、同席していたAさんは、長時間の聴き取りに疲れたためか、聴き取りの最終盤に行ったこの質問に回答していない。

Cさんに対しては、まず、満州国時代に「五族協和」「王道楽土」というスローガンを知っていたのか、さらに、皇帝溥儀の存在を知っていたのかも訊ねた。スローガンに対する回答は、「知らない。判らない」であり、続けて「小さかったし、学校へ行ったことがない」と語り、スローガンに触れる機会が無かったことを示唆された。溥儀については、「皇帝だということは知っている」ものの、それ以上のことはほとんど知らない様子であった。皇帝溥儀の知識が、当時からものであるのか判然としないものの、この回答に続く「当時の私たちは知らなくていい事は知らない」という証言は、満州国の存在が、Cさんにとって同時代的に大きな意味を持っていなかったことを示唆している。

Dさんには、現地の郷土史家より譲り受けた資料を用いて、満州国が発行した紙幣のカラー写真を示しつつ、それらの中に使ったことのある紙幣があるのかを訊ねた。Dさん当人は、「使ったことはない気がするが、見たことはある気がする」と答えたが、同席していた娘さん(満州国時代の記憶はない)は、「たぶん使ったことはあると思う」と補足していた。いずれにせよ、これらの回答では満州国を実感できていたのか判断を付けられないため、紙幣にデザインされている満州国の国旗を示し、これを見たことがあるのかを重ねて訊ねたものの、明確な回答を得ることができなかった。結局のところ、Dさんからも、国家としての満州国を同時代的に認識していたという証言を得られなかったのである。



## 2. 満州農業移民の歴史的経験の継承と風化—跡地調査ならびに施設訪問より—

図表1からも判るように、2015年の訪中調査では、聴き取りのみならず、開拓団の跡地調査や関連施設の訪問も行っている。本節では、これらを基に、満州農業移民を中心に歴史的経験の継承と風化の問題について論じていきたい。この問題は、満州農業移民の戦後史を論じる際に、今日的な課題のひとつとしての意味を持っている。

### (1) 継承における問題点

継承と風化は、二律背反の関係にある。しかしながら、満州農業移民の歴史において、そしてそれ以外の歴史でも、継承と風化は同時進行している。継承の形態はさまざまあるが、すべてを記録することが不可能である以上、どの形態でも継承されなかった歴史的経験は、風化を免れない。

大幅に改装された731部隊記念館(侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館)は、訪問当時閉館日であったが、特別の計らいで入館することができた。訪中団の団長を務めた寺沢秀文氏によると、その展示は改装前と比較して「大人しくなった」そうである。その検証も含め、展示を詳細に検討したいが、本稿の主題からの乖離が大きい。本稿では、同じ敷地内の別館(731部隊本部旧跡)で開催されていた養父母展をひとつ目の素材とする。

展示の方向性を端的に表すならば、中国人養父母の顕彰である。もちろん、養父母らが顕彰に値しないと主張したいのではない。しかし、顕彰の手段として、すべてを全面的な美談として語っていることには、強い違和感を覚えざるを得ない。個々にみれば、なかには日本人の子どもに対する純然たる善意のみで成り立ち、美談として語られるべき事例もあろう。しかし、この調査で聴き取りをしたわずか2組のなかにすら、以下のような証言をした養母がいる。

お母さんが「この子が欲しいか?」と聞いてきました。その時私は結婚して4、5年経っていましたが、まだ子どもはいませんでした。子どもを欲しいと思っていたし、可哀そうで見えられなかったので、引き取ろうと思いました。しっかり育てようと思いました。

「可哀そうで見えていられなかった」という日本人母子への眼差しを無視することはできないし、またすべきでもない。しかし同時に、「子どもを欲しいと思っていた」という自己の内在的な願望も、彼女が養母となった要因である。養父母展で確認される全面的な美談化は、こうした善悪の次元では語るこのできない要素を捨象することで成立している。いうなれば、特定の面からのみ観察しているに過ぎないにも拘わらず、それを事象の全体像として描いている。

こうした歴史認識のありようは、方向性は真逆だが、一部を拡大解釈して戦前戦中の日本の侵略性を全面否定することに通じる。特定の面だけに焦点をあてる継承の在り方は、あてられなかった面の風化を伴う。先述したように、すべてを記録することが不可能である以上、継承される歴史の取捨選択は避けられない。しかしこれは、特定の面のみ、都合の良い部分のみを継承することを正当化しない。

731部隊記念館の養父母展と養母の証言は、継承における多角的な視点の重要性を改めて突きつけているといえよう。

継承の問題点を考察するふたつ目の素材は、方正県の日本人公墓である。慰霊は継承のひとつの形でもある。毎年8月15日に日本政府主催で举行される全国戦没者追悼式、千鳥ヶ淵の戦没者墓苑や沖縄戦没者墓苑、靖国神社や護国神社、さらには全国各地に点在する慰霊碑など、その評価や賛否は分かれるにせよ、これらに共通する「慰霊」が継承の一形態としてカテゴライズされ得ることに異論の余地は少ない<sup>3)</sup>。以下、『信濃毎日新聞』の記事<sup>4)</sup>を基に、考察に必要な事実関係を整理する。

日本人公墓は、周恩来の承認を得た方正県政府により、逃避行の途上同地で死亡した約5千人の日本人開拓民の慰霊のため1963年に建立された。この動きには、Aさんの証言において言及した、中国の公的な歴史認識が根底にある。近隣には中国人養父母の墓も建立されており、一帯は中日友好園林として公園化されている。

2011年7月、方正県政府は、園内に日本人犠牲者の名を刻んだ慰霊碑を新たに建立した。この件が中国国内で非難を呼び、8月には反日団体関係者が赤ペンキをかける事件が発生した。方正県政府は建立した慰霊碑を撤去し、

さらに園を封鎖したため、公墓に近づくことができなくなった。『信濃毎日新聞』の記事は、立ち入り再開の動きを伝えたものである。訪中調査でも、日本人公墓を含め園内に立ち入ることができ、その模様は、NHKのニュースでも報じられた。しかし、立ち入りが再開されてから約3年が経過しているにも拘わらず、園内の行動には、調査団一同、細心の注意を払った。

「刻銘碑赤ペンキ事件」と仮称しておく事件は、背景に当時の日中関係の悪化があると記事で指摘されているが、慰霊に内在する歴史認識が鋭い対立点となっていることも示している。無言館(長野県上田市)の慰霊碑に赤ペンキがかけられた事件(2005年6月)も、同じ文脈で理解できよう。継承には歴史認識が不可欠の要素として存在し、歴史認識の対立が継承に影響を落としているのが現状である。

## (2) 風化の現場

この訪中調査の最後の目的は、河野村開拓団の跡地を尋ね当てることであつた。

河野村開拓団は、第13次(1944年)に先遣隊が入植した分村開拓団である。同開拓団は、現地の集団自決のみならず、送出を決断した胡桃沢村長が終戦後まもなく自殺しており、二重の意味で悲劇的終焉を迎えている。胡桃沢村長が自殺の1週間前まで綴っていた日記が<sup>3</sup>、遺族の了解の下、『胡桃澤盛日記』(全6巻。ほかに別巻1巻)として2011年から2015年にかけて公刊された。河野村開拓団跡地探訪は、訪中団に胡桃沢村長の孫にあたるEさんが参加していたことに深く関係している。

跡地探訪を風化の現場として位置づけたのは、これが大変に難航したことが最大の理由である。現地に留学している院生の現地事前調査やEさんらによる生存者への聴き取りや資料を用いた事前調査を踏まえ、候補地を絞って赴き、蓋然性の高い場所の推定まではできたものの、特定までには至らなかった<sup>5)</sup>。便宜上、跡地としたが<sup>6</sup>、痕跡を示すものは何一つ見つけれなかったのである。開拓団の跡地には、それを示す物的証拠が残存していることが少なくない。しかし、それが失われ、一方で、資料的裏付けが制約を受ける場合、頼りになるのは、人の記憶となる。後日特定できたのは、それを

持つ人を捜し当てられたためだという。

重田重守は、2004年の取材で白山郷開拓団の跡地を再訪した際の情景を、次のように描いている。

その跡地もまた、広大な平原のただ中である。

59年前、ここに開拓団建設の中枢である団本部、学校、そして167家族の住宅、匪賊からの襲撃に備える土塁などが建設されていたことなど、とても想像がつかないほどのただの平原である。

跡地の一角には所々、レンガ作りの土を掘った穴が散見されるだけで、野菜などの耕作地など何もない平原がただ続くだけであった<sup>6)</sup>。

白山郷開拓団の167世帯という値は、時期の違いから藤田繁編『石川県満蒙開拓史』(石川県満蒙開拓者霊憲奉賛会、1982年)と一致しないが<sup>5)</sup>、500人前後の規模だったといえる。これに比して、河野村開拓団は、100人弱の規模である<sup>7)</sup>。人員にして5倍規模の白山郷開拓団にして、跡地がほとんど当時の名残を留めていない。加えて、わずか2名が生存したという凄惨な集団自決や<sup>8)</sup>、耕作者・使用者が居なくなることで急速に荒廃する耕地や建築物は、70年もの歳月を必要とすることなしに、記憶の面からも物証の面からも河野村開拓団の所在地を風化させたであろう。そう考えると、跡地探訪の難航そのものが、風化の現場と思わずにはおれず、その思いは1年が過ぎても変わらない。

前項での継承に関する論理に従えば、目の当たりにした河野村開拓団跡地の風化は、継承されなかった結果である。2015年度調査では、天理村開拓団跡地で当時の建築物を複数確認できたが<sup>5)</sup>、いずれも現在も使用されている。日本の勢力が一掃された後の中国東北地域は、ソ連軍の占領や国共内戦の再発などで混乱がしばらく続いた。それゆえに、すべての開拓団跡地が有効活用されるような状況になかった。しかしそれでもなお、風化の現場からは、満州農業移民の必要性に強い疑念を投げかけている。

### Ⅲ 2016年9月訪中調査

2016年度の調査の具体的な日程は、図表2の通りである。

この調査では9名のメンバー全員に担当箇所が割り当てられ、その報告を雑誌『セーヴェル』に寄稿することとなっている。メンバー中唯一、満州移民を研究している筆者の担当箇所は、弥栄村開拓団と千振開拓団である。また、『セーヴェル』発刊前に、他のメンバーの担当箇所を著しく侵害することも憚れる。そこで本稿は、調査の要点を簡潔に記すことで別稿の予告とするに留める。

### 1. 開拓団跡地聴き取り調査の要点

弥栄村開拓団跡地では、孟家崗駅を訪ねた。かつて父親も駅で働いていたという駅員に話が聞けたが、弥栄村当時の話を父親からあまり聞いていない様子だった。伝え聞いていないこと自体をどのように評価すべきかという点に考察の要があるが、軽率に判断することはできない。

一方、千振開拓団跡地の調査では、やや興味深い証言を得ることができた。

まず、1934年の土竜山事件(依蘭事件)について、満州移民(初期の武装試験移民)を入植させるための当

図表 2 : 2016年度調査日程

月 日	場 所	内 容
8月31日	哈爾浜市街	(宿泊のみ)
9月1日	佳木斯市郊外	弥栄村開拓団跡地 千振開拓団跡地
2日	佳木斯市街	佳木斯第一陸軍病院跡 師団司令部 ほか
	哈爾浜市街	(夜行列車で満州里市へ)
3日	満州里市街	中口国境施設 ロシア式建築群 旧満州国関連施設跡 満州里市博物館 ほか
4日	扎賚諾爾区	扎賚諾爾国家鉞山公園 呼倫湖沿岸 ほか
	(中口国境線沿いを移動)	
5日	額爾古納市街	額爾古納東正教堂 額爾古納東正教堂(再訪) 額爾古納民族博物館
	額爾古納市郊外	オロス族墓地① オロス族墓地②
6日	三河回族郷	三河馬科技博物館 ほか
	上護林	百年木屋(ロシア式建築) 聴き取り① 聴き取り②
	恩和オロス族民族郷	聴き取り③
7日	恩和オロス族民族郷郊外	オロス族墓地③ オロス族墓地④
	恩和オロス族民族郷	オロス族関係の博物館
8日	海拉爾区	(宿泊のみ)
		海拉爾要塞遺址博物館 関東軍関連施設跡 和平公園 鄂温克博物館 ほか
9日	北京市市街	(宿泊のみ) 天安門広場 ほか

地の強制買収など、強圧的な施政が現地住民の反発を招き、ついには謝文東を中心とした住民武装蜂起にまで至った事件である。土竜山鎮には、抗日暴動記念碑が建てられている。証言者のFさん(男性)は、千振開拓団のすぐ近くとはいえ1938年生まれであるため、事件を直接見聞していない。それを承知の上で、現地住民の間で謝文東についてどのように評価されていたのかを聞いたところ、案に相違して、「泥棒の親玉」との答えが返ってきた。

また、「日本人と現地人」は仲が良く、現地人とは、遼寧省から同地にやってきた漢民族を指すことも語ってくれた。Fさんの祖父は100年ほど前に「遼寧省の人口過多」を理由に移住してきたという。これは1910年代の満州をめぐる人的移動と整合する<sup>9)</sup>。祖父が感じた遼寧省の人口過多は、山東省移民の増加が主因と考えられるためである。Fさんが語る限りでは、千振開拓団の日本人も、先立って同地に移住した祖父と同様に、「空いているところに入っ」て開墾した。

いわばともに新参者であるゆえに、「仲が良い」と解釈すれば良いのだろうか。ただ彼の千振開拓団や日本人への見解は、土竜山事件が生じた根本的要因と矛盾していることを忘れてはならない。そのうえで、さらなる考察は、別稿に委ねるとする。

## 2. 内蒙古現地調査の要点

次の聴き取りの機会は、三河郷からさらに北方へ進んだ20kmほどにある上護林という集落と、そこからさらに10数km北西の恩和オロス族民族郷で得られた。

満州の西部をほぼ南北に大興安嶺山脈が連なるが、その西側、すなわちモンゴル高原側には、ごくわずかの開拓団しか入植していない。その中の北限にあった開拓団が三河である。このため、聴き取りの主眼は、開拓団のことでなく、満州国の存在に置くことにした。

上護林で話が聞けたGさんとHさんからは、当地ではいわゆる古株だが、その二人からですら、満州国や当時の日本人に関して何の証言も得られなかった。これは、地理的な要因とともに、二人の年齢も関係していると思われる。上護林の観光の目玉といえる「百年木屋」群は、そもそも、ロシア革命

の混乱を逃れてきたロシア人が建造した。彼らはそのまま定住するようになったが、1950年代にロシアに戻り(戻らされ)、その空き集落に入る形で、二人の家族ら多くの中国人が山東省から移り住んだという。移住当時子どもだった二人とも、まだわずかに残っていたロシア人と交流を持ったが、そのなかで、10～20年前の満州国や日本人の話は、一切出なかったという。つまり、国境に近いためにロシア人が定住するようになったが、満州国時代の記憶を持つロシア人の大人は、GさんやHさんと薄い接点しかなく、二人と交流を持ったロシア人の子どもは、満州国時代の経験を持っていなかったのである。この真偽はともかく、現在の上護林において、満州国の存在感を確認できなかったことは確かである。

それに対して恩和のIさん(図表3)は、満州国時代や日本人の記憶ばかりか、日本語の単語、さらには、『満州娘』と思われる日本語の唄も披露してくれた。Iさんへの聴き取りは、宿泊先の宿のオーナー関係者であることを主たる理由に、調査中最長の時間におよんだ。先述の理由で、これ以上詳細に論じるのは控えるが、2016年度の調査は、開拓団も入植しなかった北方の集落で、満州国と日本人の足跡を聞いたことによって事実上の幕を閉じたのである。

図表3：Iさん近影



注記：楽器はオロス族としての生活の中で覚えたという。

#### IV おわりに

本稿の問題意識のひとつは、現地の視点を証言によって描くことであった。調査結果を用いるに際して制約があるので、これを十分に達成できたとは評価できない。しかしながら、「現地の視点」と一口にいても、それは単一のものであってはならないことを、改めて確認できた。「幻の国家」と呼んでも不自然ではないほどに、日本人以外の多くの住民にとって、満州国の存在

は希薄である。しかし満州の地は、「五族協和」のスローガンに収まりきらないほどの他民族地帯であり、それぞれが民族的なアイデンティティーを保ちつつ生活を営んでいた。

語る前提に多様な民族の存在を据えることは、もうひとつの問題意識である。満州農業移民の戦後史を考える上でも必要とされるのではないか。例えば、千振開拓団についての証言をしてくれたFさんは、満州の地に遅れてやってきた漢民族だからこそ、日本人開拓民にシンパシーを感じていると考えられる。むしろ、わずかな証言で断定的に論じることはできない。しかし、当時を語る証言が確実に減少している現在だからこそ、そのわずかな証言を可能な限り実態把握に資する姿勢は必要であろう。

また、満州農業移民の戦後史については、残留邦人と養父母、経験の継承と風化、主として2つの視座について言及したが、逃避行、国内再開拓、法的整備など、それ以外にも欠かすことのできない視座がある。これらの整理を、今後の研究を進めるための、最優先課題としたい。

## 注

- 1) 長野県歴史教育者協議会「満蒙州開拓青少年義勇軍と信濃教育会」研究会現地調査団編『中国の人々は「満州開拓団」・「青少年義勇軍」をどう見ていたかー訪中調査報告』(同調査団、2003年)、および、長野県歴史教育者協議会編『中国の人々から見た「満州開拓」・「青少年義勇軍」』(長野県歴史教育者協議会、2007年)を指す。
- 2) 満蒙開拓平和記念館設立に中核的役割を果たした寺沢秀文は、同館設立まで「旧満州または満蒙開拓に特化した記念館等はこれ(同館設立ー引用者注)まで全国どこにもなかった」と述べると同時に、「満蒙開拓青少年義勇軍だけに特化した資料館が水戸市に、「引揚げを扱った京都府舞鶴市の「舞鶴引揚記念館」についても言及している(寺沢秀文「語り継ぐ「満蒙開拓」の史実ー「満蒙開拓平和記念館」の建設実現までー」『信濃』第65巻第3号、2013年、201頁)。
- 3) 戦死者や戦没者の慰霊については、白川哲夫による一連の研究があるほか、本康宏史『軍都の慰霊空間ー国民統合と戦死者たち』(吉川弘文館、2002年)、国学院大学研究開発センター編『慰霊と顕彰の間ー近現代日本の戦死者観をめぐって』(錦正社、2008年)、浜井和史『海外戦没者の戦後史ー遺骨期間と慰霊』(吉川弘文館、2014年)などが挙げられる。慰霊に関する本稿の記述は戦後を念頭においているが、概して、戦前は顕彰を通じた国民統合としての意味合いが強い。ただし顕彰には、浜井が



「「終わらぬ戦後」の象徴として」位置づけるように、戦後慰霊の在りようである継承のツールとしての意味合いも含まれているといえる。

- 4) 「日本人公墓 立ち入り再開へ」(『信濃毎日新聞』2012年4月28日付)。
- 5) 帰国後しばらく経ってから、後日の追跡調査によって特定できたという連絡を受けた。その場所は、推定地とそう離れていない場所であったという。
- 6) 石川県教育文化財団『8月27日－旧満州国 白山郷開拓団』(同財団, 2004年), 321頁。
- 7) 長野県開拓自興会満州開拓史刊行会編『長野県満州開拓史』名簿編(同会, 1984年)より。
- 8) 久保田諫氏への聴き取り(2016年3月6日, 長野県下伊那郡豊丘村中芝部落会所にて)および長野県開拓自興会満州開拓史刊行会編『長野県満州開拓史』各団編(同会, 1984年)によると、河野村開拓団の生存者は、久保田氏を含むこの2名のほか、集団自決前に死地を脱した婦人や、逃避行前に応召されていた者がいる。久保田氏は、最後に残った2人で互いを殺害するため、「小石を集めて握り込み、殴り合った。頭部からかなり出血したものの、そのまま気絶した」と、その時にできた傷を指しつつ述べていた(2016年4月30日, 中芝部落会所にて)。
- 9) 小峰和夫『満洲－起源・植民・覇権』(御茶の水書房, 1991年)や内山雅生「山東省における労働力移動－『満州』方面を中心に－」野村眞理・弁納才一編『地域統合と人的移動－ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望』(御茶の水書房, 2006年)などに、当該期の満州への山東省移民の増加についての論及が確認できる。内山は、小峰の研究を踏まえつつも窮乏化を原因とする点について、異なる視点の可能性に言及している。